

第21回防衛問題セミナー議事録

- 1 日 時：平成24年7月17日（火）1830～2010
- 2 場 所：函館市芸術ホール
- 3 講 師：陸上自衛隊第28普通科連隊長兼函館駐屯地司令 佐藤 和之
海上自衛隊函館基地隊司令 内山 哲也
- 4 議事録：

【開会の挨拶】

（北海道防衛局長 大東 隆）

皆さま、こんばんは。北海道防衛局長の大東でございます。本日はお忙しい中、私どもの防衛問題セミナーにご参加いただき、本当にありがとうございます。また日頃より防衛省・自衛隊の活動について、温かいご支援とご協力を賜り、この場を借りて御礼申し上げます。先ほども話ございましたが、北海道防衛局は、広く道民の皆様方に、防衛省・自衛隊の役割だとか施策だとか活動について、より一層のご理解をいただくため、平成19年度より北海道各地において防衛問題セミナーを開催してまいりました。今回で21回目を数えることになり、ここ函館では3回目の開催でございます。

さて、防衛省・自衛隊では、我が国の防衛という任務に加えまして、国際社会の平和と安定に貢献するための様々な国際平和協力活動や、あるいは船舶の航行の自由を確保するための海賊対処活動などに取り組んでまいりました。国際社会からもこういった活動については、高い評価をいただいているところであり、今後の活動についても大いに期待が寄せられております。このような活動というのは湾岸戦争が起きた直後の1991年に海上自衛隊の掃海部隊がペルシャ湾に派遣されて以来、ちょうど20年目という節目を昨年迎えました。ということもあって、先ほども申し上げましたようなこれまでの活動に対する評価というものが国際社会に定着してきたわけでございます。

今回の防衛問題セミナーは、こういった自衛隊の国外における活動というテーマで、こうした国際平和協力活動に直接従事いたしました陸上自衛隊の第28普通科連隊長兼函館駐屯地司令の佐藤1佐及び海上自衛隊函館基地隊司令の内山1佐の両名から、自らの体験を踏まえた国際平和協力活動の意義だとか成果、実情についてお話していただきたいと思います。今回の防衛問題セミナーが防衛行政に対します皆様方のより一層のご理解に繋がりますことを祈念いたしまして、簡単ではございますが私の挨拶とさせていただきます。本日はどうもありがとうございます。

【講演】

(陸上自衛隊第28普通科連隊長兼函館駐屯地司令 佐藤 和之 1等陸佐)

皆さん、こんばんは、佐藤であります。本日は、7年前になります、私が派遣されたゴラン高原の状況ということで、体験談を主体にお話させていただきます。それに先立ちまして、何故ここに佐藤が立っているかということで自己紹介を簡単に、それから陸上自衛隊の部隊が派遣をされているPKO等について簡単に紹介してから、本日は皆さんを7年前のゴラン高原にご案内したいと思っております。短い時間ですが、途中風景を見ていただく時にはバンバン回しますけれども、現地に行っているということを実感していただきたいという観点ですので、あらかじめご了承願いたいと思います。

これは第19次ゴラン高原派遣隊で行ってすぐに隊舎前で撮った写真です。まず自己紹介、それから陸上自衛隊の国際平和協力活動、そして体験談という流れで説明します。

自己紹介です。私は今43歳です。熊本出身なのですが、父が防大に行きまして、自衛官だったということもあり各地を転々としました。鹿児島島の部隊にいる時に生まれ、福岡の久留米、美幌、帯広といった道東でも小さい頃を過ごしております。その後東京に行って、「坂の上の坂」という本が出ていますが、その校長が赴任する前のその区立中、都立高に行き、防大に入りました。国際関係論を専攻しまして、剣道部に在籍して剣道ばかりやっておりました。職種は陸の普通科でして、旧軍でいうと歩兵科になります。家族構成としては、ここに書いてあるとおりで、長女は小1で小さいです。派遣下に誕生しまして日本隊記念日の日に生まれました。7月7日です。長男は、自衛官になってほしいんですけども、警察官になりたいと言って跳んだり跳ねたりしています。趣味といたしましては、特段趣味と言えるか分かりませんがご覧のとおりです。一番好きなことは腹を抱えて笑うこと、それから創造的な活動です。これがあると没頭するという性格です。

部隊歴です。最初は平成4年に、今ご紹介いただいたとおり幹部候補生学校に入りまして、ちょうど小隊長の時に空挺課程とレンジャー課程に行き、2尉になって幹部候補生学校の教官になり、そこで何故か英語課程に行かせていただきました。小隊長から中隊長まで大体10年です。中隊長は大宮の第32普通科連隊の時です。その前には、1尉の時に留学して米陸軍歩兵学校に行きました。この時に、ご承知の方もいらっしゃるかもしれませんが、メル・ギブソンの「ワンスアンドフォーエバー」という映画がありますが、その収録をやっておりました。ベトナム戦争時代の車がたくさん走っていて、現地スタッフにも会ったりして非常に感銘を受けた記憶があります。中隊長を早めに下番(かばん)しまして、練馬の第1師団が派遣元ということでゴラン高原に行きました。それから帰ってきたら、陸上幕僚監部と統合幕僚監部での勤務でした。陸上幕僚監部では教育訓練予算、大体合わせると250億くらいの小さな話ですが、その総括をやっておりました。その後、防衛警備班というところで統合防衛警備の総括をやっておりました。防衛警備計画等の作成にあたりました。この後入校するはずだったんですが、同僚は定期で入校したんですが、私だけ原子力災害派遣で福島に行くことになり現地調整所で勤務し、3週間遅れて入校したという変わった経歴を持っています。

次に陸上自衛隊の国際協力活動の概要を簡単にご説明いたします。今、陸上自衛隊の部隊が出ているのはご覧の5個ミッションです。

一番上がUNDOF、これが一番古いです。現在は第33次要員が行っています。任務については、UNDOFにおける停戦監視に当たっての輸送・施設作業等を行っています。それからハイチの国際救援隊ですが、これは国連の部隊が帰った後に災害が起きて、その現地の瓦礫の除去とか道路の補修といった任務で施設部隊が活動しています。その下、南スーダンですけれども、これは一番新しいミッションです。今第2次隊が派遣されていて、先月北部方面隊を主体として約300名が上番（じょうばん）して勤務にあたっております。これは日本隊の宿営地の施設に引き続いて、南スーダンの新しい国造り支援のための施設活動を行っております。次に東ティモールです。これは任務地域におけます治安状況の監督・情報収集ということで、国連事務総長特別代表に対する報告や意見具申・助言をするような組織で、これには2名が個人派遣されています。あとは海賊対処にも警備要員等々で参加しております。

これは国際平和協力活動の枠組ですが、PKOは国際平和協力法という法律に基づいて派遣されています。あともう1つ、国際緊急援助隊法（国際緊急援助隊の派遣に関する法律）による国際緊急援助隊というものがあります。あとは点線になっておりますが、テロ対策だとかイラク国家再建、これは特別措置法に基づいて派遣されておまして、PKOとは直接は関係ないちょっと違うものです。

PKOではよく参加5原則と呼ばれるものがあります。これが保たれなければ派遣はできません。1つは「紛争当事者間での停戦合意」、それから「当事者が我が国の参加に同意していること」、そして「中立的な立場を厳守していること」、この3つがまずは大事です。そして「このいずれかが満たされない場合にはその部隊は撤収することができる」と「武器の使用は最小限」、これが5原則です。

現在、世界でPKO等の部隊が展開しています。15個ミッションで、一番新しいものはシリア監視団です。これは一番新しいものですが、色付けされているものが日本隊が参加しているミッションです。

UNDOFについては、後ほど皆さんをご案内しますので、あとで触れます。

次はUNMISの概要です。これは国家建設の支援ということで、最大軍事部門は7,000名という大規模な部隊であります。南スーダンが独立してから設置をされていて、今活動をしているところです。日本からは第2次隊です。

位置関係はこういう状況です。ここが南スーダンの場所です。

第2次隊の編成ですけれども、ご覧のような編成です。隊本部、本部付隊、そして施設がメインで、施設器材小隊、施設小隊、あとは警備と分かれていて、ジュバ、その周辺において施設活動を行っております。細部はあとで写真をご案内いたします。

これは第1次隊の活動になります。こういった自衛隊の宿営地等の施設の構築等を行っております。

これは測量を行っています。また、給水施設の補修等を行っております。

これは第2次隊が先般派遣をされましたが、その準備訓練の状況ですが、演習場等を使って現地を模擬して訓練を行っていました。

不測事態対応ということで、群衆への対応、これは想定しなければなりませんし、負傷した隊員あるいは現地住民等にどう対応するかという訓練をしています。

次にハイチでの任務です。これはハイチの情勢安定化のためということで設置されて

いますが、日本隊としてはここにあるように、国際救援隊という枠組で被災者を収容するための施設、それから人道支援物資の輸送等、あるいは施設の補修ということを行っています。場所はここです。

現地の活動状況です。補修等を行っています。

これは共同作業ということで、日米で、米国としてはPKOへの派遣はされていないようですが、作業に当たっています。

これは湖が氾濫したということで、その対応で活動している状況の写真です。

次に、国連東ティモール統合ミッションについて説明します。これは東ティモール政府に対する民主的社会構築に向けた支援ということで派遣をされています。

治安状況を監視し、国連事務総長特別代表に対し助言するという任務です。こちらは個人派遣です。

赤枠になっている部分に日本の隊員が派遣されています。こういったチーム編成になっています。

勤務場所の概要です。これは情報収集です。現場の確認等をして活動しています。

いよいよ体験談についてお話しします。最初に編成完結からどのような経緯を辿っていたのかをスライドショー的にご案内します。

最初は編成完結式であります。平成17年2月です。練馬駐屯地です。

これは見送りの状況です。駐屯地総出で見送りをしていただきました。

現地に到着しまして、宿営地のカナダ大隊の中佐ですが、業務上、指図の下に入りますので、到着の報告をしているところです。

程なく第18次隊、同期なのですが、第18次隊と幹部だけなのですが指揮転移式を実施しました。イスラエル防衛駐在官のスピーチもいただきました。最後に署名をして交代完了となります。

これは参謀長でサフランミュラー大佐という人です。

これは時期が先になりますが、8月の下番前ですけれども、UNDOFで勤務したということでメダルパレードという表彰式のようなものがありまして、その時の状況です。

細部の説明に入ります。隊の概要と派遣間の活動状況ということで説明したいと思えます。スライドには日本隊の部隊章を入れていますが、UNDOFの現地のミッションや停戦監視外の状況、あるいは山の雪などを模した部隊章であります。

位置関係を説明します。日本から約9,000キロ離れていまして、シリアとイスラエルの中間付近になります。

ここがゴラン高原です。騒然としておりますが、シリアの首都ダマスカスからこの辺が活動地域になります。輸送任務ではイスラエルのテルアビブ等も活用してこの間を輸送するのが主でした。ここにあるのがその拡大図で、AOS、エリアオブセパレーションといいます。このAラインと右側のBラインをAOSと呼称しております。それぞれの両側に宿営地、基地みたいなものがありまして、ファウアール宿営地にはUNDOFの司令部があります。日本隊からは一部がここに分遣隊等として行きました。イスラエル側のジウアニ宿営地には日本隊の本部があって、その他にカナダ隊などが宿営していました。ポーランド隊の主力もいました。任務は、第4次中東戦争を経まして、その停戦の監視の状況を確認することです。日本隊としてはその後方支援を行うこと。糧食

の輸送や水の補給、使用する施設の補修あるいは解体を行いました。現在の組織はご覧のとおりです。司令官以下オーストリア歩兵大隊、フィリピン歩兵大隊。日本隊はインド隊の後方支援大隊と一緒に活動しています。

平成17年当時の編成を説明します。全体は変わっていません。1,200人ほどいて、当時は後方支援大隊はカナダ隊、カナダ隊は交代していったのですが、日本はそこにいました。あとはポーランド大隊とオーストリア大隊という編成になっていました。

これは当時の司令官です。シャルマ中将、ネパール人です。こちらはオーストリア人のサフランミュラー大佐、参謀長です。

日本隊としましては43名、今はちょっと1~2人増えていますけれども、隊本部と輸送班、分遣班、施設作業を行う重機を持っています。それと警務班という編成でした。関東にある第1師団を中心に編成されました。隊本部班には副隊長の1尉のほか、医官の1等海尉、炊事の1等空曹も入れて編成されました。

輸送班ですが、班長は1尉です。ちょっと補足ですが、ここに行く前に第1師団で中隊長をやっている時にFTCという訓練センターで行われた協同訓練に参加しました。その時に師団管内のいろいろな部隊がいて、その隊員と戦友のような状態で、その彼らがUNDOFに行くことになった時にも大勢手を挙げて、「それじゃあ一緒に行くか」ということで連れて行きました。したがって私がいた第32普通科連隊からは10名行きましたが、輸送隊にもかかわらず普通科が10名、輸送隊出身者は1名ということでちょっと変則的な編成だったかもしれませんが、絆が大事という意味で非常によかったと思っています。

分遣班です。このように炊事担当の海上・航空自衛官もいましたし、補給担当の海上自衛官もいました。

全体では海・空4名ずつも併せて編成されていましたが、普通科が大変多いという状況でした。師団の編成ですので陸上自衛隊は関東が中心です。このほか海上自衛隊は江田島と舞鶴、航空自衛隊は全国から派遣されていました。

任務です。先ほど少し触れましたが、停戦監視がUNDOF全体の任務です。そして兵力引き離しに伴ってのいろいろな協定事項、取り決め事項があり、これらの履行状況の監督がUNDOFの主要な任務です。

これは歩兵大隊のパトロール状況です。装甲車を使ってパトロール等を実施します。

日本隊の任務です。先ほども触れましたが、輸送、道路整備等が任務になります。

活動状況です。この水の輸送が非常に貴重でして、水道の水は飲めません。首都ダマスカス近郊の水工場から直納で運んできてUNDOFの部隊に納める、あるいは配っていくということを行っていました。これはイスラエルの現地従業員なんですが、彼らを迎えに行き運ぶ。あるいは輸送の各種任務の調整等を行いました。

施設分遣の任務ですが、道路補修、宿营地整備あるいは一番高いヘルモン山という標高が2,800メートルある山があります。冬は完全に雪に閉ざされるので、除雪作業も行いました。それから24時間待機しており、UNDOFの各国の隊員の車両が故障したり、あるいはスピードの出し過ぎでひっくり返ると、それを連絡を受けたらすぐに駆けつけて回収していくという任務。あとは燃料補給所の運営も任され、それらと併せて行いました。

これは日本隊の本部に現地従業員でデビ・ベンシモルといいます、第1次隊からずっと勤務している秘書です。

これは警務です。レバノン輸送の時のもので、レバノン憲兵隊と調整しながら行いました。それから日本文化の紹介なども行いました。

次に現地の状況です。体感してください。これがイスラエル側の激戦地だったんですが、今でもこのように鉄条網と地雷が埋められています。これがヘルモン山で、右側の上の方がAOSです。

イスラエル側は、3月は水が豊富でこのように牛などがいます。

これは涙の谷という地域です。第4次中東戦争の激戦地として対機甲戦闘が行われた地域です。ここで当時の指揮官が、夜が明けてみるとあまりにも悲惨な状況で涙を流したということでこのように呼ばれております。今でも塹壕が残っていて、イギリスのセンチリオンという戦車のダミーが置いてあります。

これはアラブ側の戦車だと思いますが、このように撃破された跡や残骸が残っております。その激戦で戦った兵士たちを弔う、榮譽を讃える慰霊碑なども建っています。

一方、高所から見下ろすという地の利を得ているイスラエル側ですが、このように山の上に監視施設を持って情報収集を行っています。しかしながら、その細部は不明です。

これはガリラヤ湖といって、高地を下りてイスラエル側をずっと行くと湖があります。キリストが湖面を歩いたといわれている旧約聖書に出てくる湖です。

AOSの一番の激戦地域でイスラエルが攻めて取ったんですけれども、停戦時にAラインまで下がったという所です。ここはクネイトラという非常にハイカラな街だったんですが、このように破壊されています。

AOSの表示をどうやっているかという、地上に線は引いていませんので、このようにバレルが置いてあり、これらを結んだAラインとBラインという線でAOSが表示されています。

こういう家がたくさんあります。何を食べて何を生業としているのか不明ですが、こういう家がいっぱいあり、必ず放牧されています。

道路がこのように段々よくなってきています。

これはシリア側のファウアール宿営地から山を望んだところです。

AOS内には、未だに地雷がたくさんあり、このように専門部隊が地雷を除去しています。地雷はないというところは赤で表示され、ここしか通れません。あとはよく分からないというような状況です。時々爆破も行っています。

あとで紹介しますが、AOS内にはマーチというものがあり、このように競技会的に、訓練と称して歩くといった行事も行われます。

AOSの南端の方は、北の方はものすごい山でしたが、南端は峡谷になっていて、ものすごく暑いところでした。

AOS内にはポジションと呼んでいますが、各歩兵大隊の拠点のようなものがあり、監視塔あるいは外柵を張り巡らせて拠点的に活動しているというような状況です。このように平原にポツンとあったりもします。

これはヘルモン山の頂上にあるオーストリア大隊の拠点です。一番高所にあり、冬は雪に閉ざされます。

次に宿営地を紹介します。これがシリア側のファウール宿営地です。これは司令部なのですが、ペンタゴンと称しています。ペンタゴンでは全くないのですが、異様な形をしていたのでそう称していました。

これはイスラエル側のジウアニ宿営地です。ここにバンカーというものがあり、非常事態が生起して砲弾などが落下してきた時にも活動を継続できるように、それぞれ普段の隊舎の方からここに入り込んで活動を継続するという施設があります。

活動地域の情勢等です。ヨルダン川西岸地区とガザ地区というのは、今もそうだと思うんですが、いろんな事案がありました。部隊の活動地域には大きな影響はないという状況でした。

これはレバノン側です。レバノンで装甲車で輸送する業務がありましたが、これもベイルート avoiding レバノン山脈を越えて活動していました。

本派遣の特性です。このUNDOF近代化計画というものが実施されていて、締めくくり当たる時期になっていました。これをしっかりやっつけていこうということで、団結を高めていました。特に陣地の統廃合、装甲車の換装という業務に直接寄与しました。何故行ったかという、固定的な陣地を廃して、壊して、そこに張り付いている部隊をパトロール部隊としてうまく使っていこうと。陣地はそれぞれ今ある所を強くしていこうということで行っていました。

これは装甲車の換装です。坂に弱い装甲車からフィンランド製に換装する。それに伴った輸送業務等を行っていました。

これは平素の生活物資等の輸送業務の状況です。

レバノン輸送の状況ですが、非常に長距離の輸送なので、帰ってくると時々はみんな国旗を振って出迎えたという状況です。

陣地の統廃合ですが、先ほど言いましたように廃止して更地化していくという任務で、重機を持っているのは日本隊だけだったので、日本隊の方でこれを鋭意行っていました。陣地の解体にはこういったドーザを使っていました。

一方で施設器材の整備も自分たちで行っていました。大きな整備は部外の工場に委託しますが、非常に忙しい毎日でした。こちらは改修です。また、燃料補給所の運営も行っていました。

老朽化施設、古くなった施設を壊して新しい施設を建てる。これに伴っていろんな機材を持ち込んだり整備を行いました。こちらは陣地整備に伴う通信施設の整備の状況です。

警務班は2人います。交通統制と各国の憲兵隊等と連携をして規律の維持等に当たっていました。

本部班です。これは事務室の状況です。こちらは炊事要員の活動状況です。海上自衛隊と航空自衛隊は専門の要員がいますが、陸上自衛隊はそうでもありません。日本食は各隊から非常に人気のある料理でした。

隊本部のミーティングの状況です。これは非常に重要で、指示を徹底するために活用していました。

不測事態対処訓練、多分ないだろうと思ってもやはり非常に重要で、宿営地の中に侵入してテロ等をはたらく者がいるという想定でUNDOF全体がやる中で、我々も

勉強して行っていました。侵入したところを捕らえるとかです。時間があれば紹介したいところですが、武器使用権限というものに現地でも非常に問題意識を持っていて、カナダ隊は近くにいて我々を助けてくれるだろう。しかし我々は助けることができないということで、もしそうなったらどうしようとずっと考えていました。これも現地の意見としては、本当に非常事態の時には助けられるようなことがあった方がいいのではないかと。もしできなかった場合には、50年の信頼を一気に欠いてしまうのではないかと、いうことを思っていました。

これは化学攻撃があったという想定で防護しています。

次に業務遂行の考え方です。UNDOFの近代化計画の締めくくりということを立て上げましたが、気を付けたことは、「PKOの意義とは何だ」ということを常に言って認識をさせることです。それから競技会や訓練を使って気を張らせることと団結を強化すること。結束力をなくすと一番よくないと思っていました。また、家族に対してもいろんな現地だよりを送って強気に発信していくことを行っていました。今連隊長としてはこんなことを言いませんが、当時は結束だけが大事だと思っていましたので、こんなことを行っていました。今回、4快2禁をいう言葉を思い出したのですが、快食・快眠・快便・快笑は大事だと。そして酒は遅くまで飲むな・負担は個人に集中するな、ということに細心の注意を配しながら力を結集していこうと統率に当たっていました。

その他の活動です。いろんな競技会があり、これはUNDOFが主催するもので車両競技会です。これは団結あるいは技量を競うもので、これは非常に有効でした。我々は頑張りまして全ての部で優勝しました。非常に士気が上がってよかったです。

AOSのマーチでありまして、これは区切って行進していきます。このうち8名は全てに参加しました。

現地はこういう状況です。地雷の間を縫って行ったり、稜線を歩いたり、自分たちが除雪したところを歩いたりしました。

また、これはUNDOFオリンピックとあって、いろんな競技があり、サッカーでは勝てなかったんですが、リレーでは優勝しました。またオーストリア大隊が主催する持久走大会で優勝しました。

これはUNDOFとは関係ありませんが、イスラエル軍が主催する体育祭にも出ました。

これは文化紹介です。現地のJICA等からも要請が来ますが、ダマスカス大学に行って、私はやったことはなかったのですが、居合刀を買って持って行って、なんちゃって居合をちょっとやって興味を引きました。見ている人たちの目が光っていました。剣道の展示でスポーツチャンバラをやりました。スポーツチャンバラは現地の学生にも参加してもらって行いました。

これは日本隊記念日です。各種武道、太鼓など文化の紹介を行いました。

幻の派遣国ウクライナがカナダ隊に替わって来る予定になっていて調整もしたんですが、後日他の国へのPKO部隊で不祥事が発覚してウクライナの派遣が差し止めになってしまうといったハプニングもありました。

最後になりますが、派遣隊の指揮官として非常に感銘を受けました。まずはポーランド大隊長です。中佐ですが、この人はアメリカにも留学した経験があり、指揮官として

の振る舞いというものを学ばせてもらいました。こちらはカナダ大隊長です。下番する人と交代する人から表敬を受けた時の写真です。大隊長は非常に気むずかしい人で、なかなか打ち解けなかったのですが、徐々に関係を親密にしていって、風通しのいい環境を築きました。どんな状況であってもいい関係を作ることは任務遂行のために第一に重要だと痛感しました。

司令官のシャルマ少将（のちに中将）は、ロシアの防衛駐在官やイギリス等への留学をしていたり、若い時にもPKOに参加していて、非常に風格のある将軍でした。常に二言目に私に言っていたのは、「日本隊はUNDOF 1, 200人のうち40人しかいないが、規律の維持という面で非常に存在は大きい」、「君たちがいるだけでUNDOFの規律は維持されるし、話さないで黙々と業務を進めるということで非常にいい」と。

「ついてはカナダ隊がUNDOFから退くに当たっては日本隊が来てくれ」と。カナダ大隊長から「来てくれ」と常に言われていまして、それは本国にも話をしたのですが、他にインドとか北欧の派遣隊が手を挙げたこともあってなくなってしまいました。そのように日本隊が非常に高く評価されたということを誇りに思いますし、また現地派遣隊長としては、もう少し派遣規模を拡大してもよかったという気はします。このようにいろんな指揮官と、各海外勤務を経た派遣隊長として来ている人たちと触れあえたことは、非常に大きな参考になりました。常に笑顔で握手をして、陽気でそして冗談を言いながらいろんな調整をして話を通していくということが非常に参考になりました。現在、それが完全に反映されているとは言えないかもしれませんが、今の自分に役立っていると思っています。

駆け足になりましたけれども、最後のところ、派遣隊を如何に統率していくかというところと、派遣隊員の思いだとか家族への発信という観点で、今UNMISに北方から行っていますが、これが1つの皆さまへのご理解の資になれば幸いです。以上で終わります。ご静聴ありがとうございました。

【講演】

(海上自衛隊函館基地隊司令 内山 哲也 1等海佐)

皆さま、こんばんは。函館基地隊司令の内山でございます。今ご紹介いただいたとおり、私は元来船乗りで20年間ぐらい船に乗ってきましたが、かなり海外に派遣される機会が多くて、インド洋の補給支援活動も5ヶ月を計2回、今からお話するスマトラでの津波の時の派遣、それ以外にもいろいろな海外派遣があり、合計30カ国ぐらいの国に行って知見を広めてきて、結果やっぱり日本が一番いいと思っています。今日は海上自衛隊の国外における活動ということで、まずは広く浅く、冷戦後の経緯を簡単にお話した後に、インドネシアの大津波の時の話を紹介したいと思います。よろしくお祈りします。

この表は、冷戦期の昭和28年から昭和61年までの海上自衛隊の主な活動なんですが、青字は全て災害派遣です。黒字はその他の事案で、要するに全部国内でした。こういう洞爺丸の台風だとか、羽田沖の全日空機の遭難だとか、伊豆大島の豪雨、全て海上自衛隊は国内で活動していました。

それが平成3年から現在に至るまで、赤い字が海外での活動です。こういうふうにはペルシャ湾の掃海艇派遣から始まって、カンボジアPKO、トルコ、それからインド、そして補給支援あるいは海賊対処活動といった、国際的な活動が急に増えてきたというのが現状です。ここにこういう印がありますが、これは私自身が参加した活動で、ナホトカ号の原油の流出では日本海に行きました。後はテロ特で補給支援活動。これはアラビア海、北アラビア海で5ヶ月くらい各国に油を供給していました。今日お話しするインドネシアでの国際緊急援助活動、それからもう1回、この時インド洋は2回目なんですが、この時は自分は指揮官として、中東の地で3ヶ月くらい活動しました。その後北朝鮮が弾道ミサイルを発射した時には、実は私はイージス艦「こんごう」に乗っていて、すぐ北朝鮮の近くまで行ってずっと見張って「もし日本に落ちるのであれば打ち落とせ」という命令をもらって、緊迫した数日間を過ごしました。最後の東日本大震災の時には、大湊地方総監部の防衛部長だったので、現地の飛行機とか艦艇、航空機の運用を担当していました。この時に函館にはお世話になって、このことは是非お話ししたいのですが、今日は時間の都合でお話できませんが。

これは海上自衛隊の任務の拡大状況です。昔はこの日本周辺でいろんな活動をしていたんですが、これがどんどんオイルルート沿い、例えばこれが補給支援活動、そして海賊対処です。そういったオイルルート沿いの活動に海上自衛隊の活動の地理的な区域が広がってきたというのが1つと、任務の質が多様化してきたということが言えると思います。

例えば現状は我が国周辺における活動として、海上自衛隊は日本周辺で何をやっているのかということ、これが排他的経済水域で200海里と呼ばれます。この前ちょっとここが広がってよかったですと思いますが、こういったところでP-3Cという飛行機が毎日飛んでいて、日本の周辺の海域で変なことが起きていないかということと監視しています。監視して何か異常なことがあれば防衛省を通じて官邸に報告されるなどしています。潜水艦乗りにならせると、「日本周辺を走るのが一番嫌だ」と。「潜望鏡を出した途端に捕まる可能性があるから、世界でも非常に走りにくい海域だ」ということ

を言っております。それ以外にも指定護衛隊群というのが、8隻で1グループの護衛隊群を形成しているんですが、それが4つあります。そのうち1つは、常に燃料も食糧も全て満タンにして、何かあったら何時間かですぐに出航できるような態勢をとっていますし、弾道ミサイル対処でも先般あったとおりです。それ以外にもいろいろな国際緊急援助活動に対してスタンバイする船などをずっと指定しています。

これは中国海軍の話ですが、先般、2年前ですか、沖縄と宮古の間を10隻以上の艦隊が示威行動のように通って行って、当然海上自衛隊はその監視で船で追尾するんですが、その時に中国のヘリが艦艇から50メートルくらいのところに近づいてきてローパスというか、示威行動をするわけです。こういう動きについては、世界的にいうとアウトです。こういうことをやってはならないという暗黙の了解みたいなものがありますが、そういった常識が中国には通用しないのが現状です。外交ルートで抗議はしていますが、中国海軍は非常に活動を活発化させているというのが現状です。

これは先ほどちょっと言いましたが、北朝鮮がムスダンリから弾道ミサイルらしきものを撃った時です。この時私は「こんごう」という船に乗ってまして、この図よりも少し近かったのですが、この辺でムスダンリにイージス艦のスパイレーダーの網を被せて、発射したらすぐに探知できるようにしていました。実際に、4月5日に探知した時にはすぐにイージス艦のレーダーが探知して、それを防衛省などのいろんなところに送るとともに、日米で協同してこのミサイルは日本に落ちるか落ちないかをまずチェックし、日本に落ちそうだったらそれまでに撃ち落とす。落ちなかったら撃たない、そのままという判断の時間が、発射してから10何秒しかないので、その間にきちんと判断しないといけないという非常に厳しいミッションでした。これもここに10日以上張り付いていて、その時ずっと何もしていないわけではなく、1日何十回もシュミレーターを使ったリハーサルをして、訓練をしながら対処していました。

これはパシフィックパートナーシップ2010というもので、医療人道支援とか災害救援活動を通じて地域の安定化に寄与するのが目的なんですが、この時は日本から輸送艦「おおすみ」、アメリカからはグアム経由で病院船「マーシー」という、スマトラの大津波の時には我々の船のすぐ横にいましたが、こういう船が来てベトナムやカンボジアなどで医療支援活動を行い、地域の安定化を図るという活動も行っています。

これはインド洋の補給支援活動です。私も2回行きましたが、ここはアフガニスタンで麻薬をいっぱい作っています。その麻薬をこの海のルート、海の麻薬ルート、私たちはハッシュウェイと言っていました。昔の江戸時代の千石船みたいなダウ船という船が無数に通っています。その中にはこういう武器や麻薬を積んでいる船がいて、それを各国の海軍が取り締まります。ずっと洋上にいると、燃料がなくなってしまう。また港に帰っていたらものすごく時間がかかるので、日本の補給艦がここで油をあげるといったものが我々の活動でした。そういったことを私は最後から2番目、これは途中で止めてしまったんですが、最後から2番目の指揮官としてこれに従事してきました。

これは今行っている海賊対処活動です。こっちがヨーロッパ、紅海。バブ・エル・マンドブ海峡を通過してアデン湾に出る。日本はこういう形で輸送していくんですが、このソマリアという国が、今は国として体を成してなくて、海賊が跋扈（ばっこ）していて、ここからどんどん行って船を拿捕して何十億という身代金を取ることから

守るために、このように船団を組んで前後に護衛艦を付けます。その上にヘリコプターを飛ばして守っているというのが現状です。

加えて、海上自衛隊からP-3Cという飛行機2機を派遣して哨戒しています。やはり、空から見張ると船から見張るのとは違って、広いエリアを見ることができて、しかもその情報をネットワークを通じて日本とかいろいろな他の海軍の船とかにも提供できますので、非常に現地では重宝がられていました。

それ以外にも防衛交流とか多国間訓練というものもやっております。

最後に米海軍との連携強化ということで、大体日本は戦後50年間アメリカとの相互運用性、インターオペラビリティというものを追求してきました。どういうことかという、洋上でばったりと遭ってもその場でいろいろな訓練や意思疎通ができたり、協同で対処できたりというプロセディアというのを共有してきたというものです。そういったことが今年50周年を迎えて更なる強化を図っているというのが現状です。

ここまでが海上自衛隊の今までの国外における活動の概要で、広く浅く説明しましたが、今からちょっとインドネシアの津波の時の話をしたいと思います。

この3隻で行きました。1隻目は護衛艦。これは何のためにいるかという、この2隻を守るためです。あとはヘリコプターを積んでいて、急患とかいろいろな輸送があった時にヘリコプターのステーションとして活用します。この真ん中にあるのは補給艦といって、この2隻の船に燃料や食糧などを定期的に供給する。護衛艦というのは、1週間走ると燃料がなくなってしまうので、この船がついていないとなかなか長期行動ができません。現実にはこの船は、スマトラとシンガポールの間を毎日ではありませんが、週に1回は往復して新しい燃料や食糧を護衛艦に供給するのがミッションでした。現場ではこのようなホバークラフトやヘリコプターを使って救援活動を実施しました。

これが先ほど言った3隻の編成状況の写真です。海上自衛隊の任務は、陸上自衛隊の海上輸送、それから陸上自衛隊への支援という2つの任務が主な任務でした。要は陸上自衛隊を支援しなさいということで派遣されました。

これは横須賀で1月9日から11日にかけて、発災自体は12月26日でした。なぜ1月9日かという、インドネシアから要請がきたのが1月3日でした。それから先遣隊を派遣して帰ってきてから準備という話になると、こんな時期になってしまいました。私はちょうど正月休暇を取って家で酒を飲んでいたんですが、電話がかかってきて「すぐに出動しろ」ということで大騒ぎになって、バタバタとしながら出航して行きました。大体国際緊急援助活動というものは、いつ起こるか分かりません。起きたらすぐに行けということで、本当に準備はバタバタしながら行きます。こういうふうにして陸上自衛隊の飛行機や車両を載せて現地に向かいました。陸上自衛隊の隊員が横須賀から乗るのかと思ったら、シンガポールまで飛行機で行ってそこで船に乗るという調整がありました。この写真、面白いのですが、ローター、ヘリコプターの羽根を外しています。陸上自衛隊側の飛行機は艦載機ではないので、ローターをたためません。海上自衛隊のものはたためるので外さなくても大丈夫なんですが、その辺が陸と海の航空機の違いです。

こういうふうにチヌークという大きなヘリコプターを3機積み込みました。シートで包んでいるのは、塩をかぶったら飛行機が壊れてしまうので、またこの飛行機は大きすぎて中に入らなかったのがこのような処置をしました。小さいヘリコプターはこのよう

に艦内に入っています。

行きは「くらま」と他の部隊がそれぞれ横須賀と佐世保から出発して、台湾の東で合同して南シナ海を通過して、シンガポールで補給品を搭載して、そして陸上自衛隊の本隊が乗ってきてバンダ・アチェ、バンダ・アチェというのはスマトラの先端にあります。この辺が震源地でこの辺りは全部津波でやられております。我々はこの辺に来て主にこの西海岸の避難民の方々を助けたということです。

これは帰りです。帰りはまた逆にシンガポールに寄って陸上自衛隊はここで降りて、その日のうちに日本に帰ったんですけども、海上自衛隊は船で帰らないといけないので「いいなあ」と思いながら、その後10日くらいかけてやっと日本に帰ったというのが現状です。

我々が現地に着いた時には、すでにこれだけの各国の艦艇が滞在していました。アメリカの空母「リンカーン」、横須賀を定係港とする駆逐艦「シャイロー」、佐世保を定係港とする「エセックス」、揚陸艦です。それ以外にもオーストラリアとかドイツ、そしてフランスといった艦艇がいました。私たちはここから近づいていきましたが、まず着いてすぐにヘリコプターで米空母に乗って行って、「今どういう状況かブリーフィングしてくれ」ということでブリーフィングを受けました。こういう時に各国の船は、オーバーオールでネットワークを組んでいます。要するにイントラネットです。衛星の電波や衛星回線を使って各国がネットで繋がってウェブが共有できたり、チャットができたりするというシステムができあがっています。それに留係して、いろんな情報交換は、もしも電話ではなくてウェブとチャットで行います。チャットで行うと非常にいいのは、英語が聞き取れなくても字で見えてくるので正確に理解できるというのは非常にいいです。これは災害派遣なんかに活用できると思っています。

これは帰る時の状況です。この時は各国先に大分帰ってしまったんですが、日本はなかなか帰りませんでした。何故かという、こういう活動は引き際が難しい。決してインドネシア自体は「もういいから帰ってくれ」とは言いません。「支援してほしい」と言います。ところが国際緊急援助活動というのは、まさに緊急援助であって復興援助ではないので、いつ帰るかというのは微妙でセンシティブな問題でした。我々も出発した時に日本にいつ帰れるか分からないような状況でしたので、乗組員たちもそういうことがとても気になっていたのですが、最終的には3月に帰ることになりました。

どういう活動をしたかという、さっき言った輸送艦がここに錨を打って、ここから毎日バンダ・アチェという昔日本軍が造った飛行場があります。すごく立派な飛行場なのですが、そこに物資などを運んでいろんな活動をします。あとヘリコプターがバンダ・アチェ空港に集積された救援物資を、道路が寸断されているのでこの辺に点々と避難民がいて、輸送が止まっている状態になっているところに、飛行機でいろんなものを配るといった活動を行っていました。補給艦「ときわ」は、ひたすらシンガポールのチャンギー軍港とアチェの間を往復して我々にいろんな必要なものを運んでくれていました。

現地に着いて、陸上自衛隊の車両をこのLCACというホバークラフトで陸揚げして、最終的にはここから収容して日本に帰りました。

これは海上自衛隊がどういう支援を行ったかというものです。この青い服は海上自衛隊の服なんですけど、最初の頃は海上自衛官は船の中だけで、帰ってきた陸上自衛官にご

飯を食べさせたりいろんなことをするのですが、乗組員たちが途中から「私たちも現地に降りて、汗を流して手伝いたい」と言い出し、希望者が殺到して、陸上自衛隊の方と調整したところ、「是非手伝ってくれ」ということでした。艦内で作業員を募集してみると、本当にみんなが希望して人選に苦労しました。やっぱり現地に派遣された隊員としては、少しでも汗を流して、大地に下り立ってその現地の人を助けたいという思いが強かったようです。

あとは、陸上自衛隊の人に区画を使ってもらったり、食事と一緒にするわけです。普段は陸上自衛隊と海上自衛隊は一緒にご飯を食べないので、最初は半分が陸上自衛隊、半分が海上自衛隊という感じでかっちり分かれて、人見知りしながら食べていたんですが、最後のころはこのようになりました。人間、1ヶ月も一緒に暮らすと、段々仲良くなります。最終的には顔見知りになって一緒にご飯を食べるといような状況になりました。現場というのはやっぱりそんなものだと思います。

海上自衛隊のヘリコプターもこのようにして援助物資を積んでいきました。

一番評価されたのは、道路がずたずたになっていて、北側と南側から少しずつ直していたのではずっと時間がかかるので、インドネシア当局から「日本はLCAC、ホバークラフトを持っているから、是非ここに重機を集めるから、その重機をいろんなところへ海から陸揚げしてくれ。そうすると何カ所も同時並行的に道路が改修できるだろう」と言われました。道路が開通するということは、自分たちで何とかやっていけるという1つの証なんです。ですから、このように重機をいろんな所に陸揚げしました。

こういった重機を合計で34両、いろんな所から運びました。これは後からDVDでお見せします。

結局、このように津波でやられたところが、このように繋がっていきました。

陸上自衛隊と海上自衛隊では、最初は何を言っているか分かりません。使っている単語も違うので。毎日夕方に、海上自衛隊側と陸上自衛隊側の首脳が集まってミーティングをして、明日の作業をどうするのかということ进行调整しました。元々このミーティングは、バンダ・アチェの空港で各国集まって、インドネシアが司会をして「日本は明日何をしてくれ、オーストラリアは何をしてくれ」という仕事を持ち帰ってきます。それをここで「じゃあどうしていこう」というのを毎日ミーティングをしながら、活動していました。

今でいう統合幕僚監部も現地に事務所を持ってきて、インドネシア軍との調整や現地の情報を調査してくれました。要するに統合幕僚監部と海上自衛隊と陸上自衛隊が三位一体で活動していました。

通信については、現地は壊滅的な打撃を受けていたのでなかなかできませんでした。しかし、船の部隊は衛星を通じて本国と通信します。これはいつも、今もそのようにしていますが、24時間繋がります。あとは、統合幕僚監部の連絡所とは国際ローミングの電話、あるいは陸上自衛隊ともHFやMFの電話を使って連絡しました。ここで特筆すべきは、先ほども少し触れましたが、海上自衛隊と米海軍とはずっとインターオペラビリティをやっているのです、通信系もすぐにパッと繋がります。そのように共同のネットを繋いでいたので、このラインで非常に大きな情報網ができました。要は、海上自衛隊のオペレーションで一番大事なものは通信になります。これがうまくいかないと、なかなか

かオペレーションができません。

これは現地のバンバン少将とって、インドネシアの最高責任者の方です。この人やアメリカ空母の指揮官に会いに行ったり、フランス海軍が来たり、しょっちゅういろんな指揮官同士が顔を合わせながらいろんな調整をすると話が早いのです。

この間、船や飛行機は故障しますから、船も130件くらい故障しましたが、大体は乗員だけで直してしまっているし、航空機のトラブルも全て乗組員で直しました。手前味噌ですが、日本人というのは器用なんだと思います。こういった整備兵たちが一生懸命夜を徹して直してしまうということが結構ありました。

水だけはマレーシアから輸送しました。船でも浄水できますが、ここで20万人くらい亡くなっているんです。そういう方々が眠っておられる海の海水から水を作ってご飯を炊くというのは、心情的になかなか厳しいものがありました。だから水だけはマレーシアからこの船で時々補給していました。

活動中は日本からいろんなメディアの方もお見えになりました。取材対象としては延べで宿泊が73名、取材は日本人が119名、外国人のプレスも21名来られて、新聞・報道でのこれだけの回数の取材で、正しく評価してくれたのではないかと思います。

また、いろんな高官が来訪されました。この頃はまだ防衛庁だったので防衛庁長官などが、いわゆる激励に来られます。隊員たちは確かに激励されたと思いますが、私みたいな幕僚は、来る度に説明資料を作ったり、準備が大変でまた来るのかと内心思っていました。でも隊員たちには、こうやって隊員を集めて自衛艦隊司令官自らが「何か不満はないか」と言って聞いていたんです。隊員もいろいろ言っていました。そのような率直な会話があって、非常にガス抜きになってよかったんだと思います。

これは、先ほどバンダ・アチェ空港を旧日本軍が造ったと言いましたが、こういう鎮魂碑も建っていましたが、これが倒れてグチャグチャになっていたんです。それは何十年も日本人は行っていないし、使っていないし、ちょっと前まで紛争地域だったので、在外公館の人も入れないような地域で荒れていました。これはいかんということで私のカウンターパートにインドネシア軍のハッタ大佐という人がいて、彼に「何とかしてくれよ」というふうに言ったところ「分かった。日本のためなら何とかする」と言ってくれて、このようにすぐに直してくれました。お墓なんかもサバンという島に行った時には現地の警察が「おまえ日本人か。ちょっと来い」と言ってここに連れてきてくれたんです。ここは草ボーボーでお墓が倒れていたんです。「これは何だ」と聞いたら、「明治大正時代に入植した日本人のお墓だとかで、何十年も人が来ていなくて朽ち果てているんだ」と言われました。そういったところには、隊員を連れて行って草刈りして供養して帰ってきました。

隊員も2ヶ月半働きづめだったので、ちょっと休ませないといけないということで、さっき言ったサバンという島にボートで行かせて、ちょっとぶらぶらしてこいと言って散歩をさせると、現地のインドネシア人は、すごく日本人に対して優しいんです。これも後から申し上げますが、安くておいしいものを焼いてくれたりしました。イスラムの国ですから、我々も2ヶ月くらいビールを飲んでいないので飲みたいとずっと思っていたんですが、インドネシアはイスラムの国だから飲み屋は一切ない。どうしようもないと思ったら、こういう隊員たちは、そういうところでもビールを売っているところを見つ

ける能力がすごく高いんです。なんか知らないけど「首席幕僚、見つけました」と言ってきたので、教会の裏の地下について行くと、そこに酒屋があって、そこで2ヶ月ぶりのビールを飲んでおいしかったという記憶があります。たくましいです、隊員たちは。

これは家族と話をしている写真です。インドネシアの時に、陸上自衛隊は50台こういう衛星携帯を持って行って、海上自衛隊は3台しか持って行かなかったんです。海上自衛隊はその3台を海上幕僚監部から「使うな」と言われているんです。「お金がないから」と。一時期、陸上自衛官だけが甲板で家族と話していて、海上自衛官は一切家族と話せないという、士気を維持する上で非常にまずい状況になったので、陸上自衛隊にお願いして「すみませんけれども使わせてください」と言って使わせてもらいました。但し、1人2分ということで、この隊員は時間を計っています。「何秒前」と一生懸命言っているわけです。「あと10秒」なんて言われると「じゃあ最後、元気でね」と言って電話を切るわけです。そしてまた次が待っているという状況です。やっぱり海外に出ていると、家族が一番心配なわけです。特に国際緊急援助活動は連絡も取れないままバツと行ってしまうんです。だからこういうものは非常に大事です。

成果ということですが、付与された任務を全て完遂して、我が国がこの地域における責任ある国家としての責務を果たすことに貢献できたというのが成果です。あとは陸上自衛隊と海上自衛隊という文化の違う組織と一緒に2ヶ月半過ごして理解し合ったというのは統合運用の芯になっているのではないかと思います。

説明はこれまでで、DVDを流します。時間があまりありませんので、早回ししながら映像を見ていただきたいと思います。

－DVD上映時解説－

これは1月9日に横須賀港に「くにさき」が入ってきて、ここでいろんなものを搭載するわけです。みんな正月休暇中に狩り出されて出港しています。陸上自衛隊の隊員も一部乗ってきてます。

このようにして自衛隊の車両をどんどん運んできて、このようにチェーンで固定する。航空機はローターを外してそして中に入れ込むと。あとは薬だとか補給物資といった物を積み込んでいきました。

これは司令官から訓辞を受けて出発するところです。そして乗り込んでいっていざ出港ということで、いつ帰ってくるか分からないんですが頑張ってくるぞという感じです。

これは出港して洋上補給とって、補給艦がまっすぐ走って護衛艦がそれに近づいていって油とか食糧をもらう作業、我々は洋上補給と言っているのですが、これが補給艦に船が近づいていって索を渡して、大体間が45メートルくらいです。それでこういう管を繋いで、1分間にドラム缶50本くらいの燃料をこれで積めるんです。積み終わったら下げてまた持って行くと。これが洋上補給という、我々がインド洋で各国に補給支援活動を行っている時の作業です。

これはホバークラフト、「くにさき」の艦内に積んでいます。操縦はほとんど飛行機と同じです。

それからシンガポールに到着し、最後の食糧を積むんですが、日本と違って海外で食糧を積むと何割か腐ったりしています。だから、ちゃんと搭載物品のチェックをしながら

ら、本当に数があるか、腐っていないかチェックしながら積み込んでいきます。

こういうふうにしてシンガポールでやって、そのあと陸上自衛隊が日本からチャンギー空港まで来て、ここで乗り込んできました。ここで初顔合わせをしているような調整をしながらマラッカ海峡を北上していったわけです。記者会見もしました。

シンガポールを出航して一路マラッカ海峡を北上して現地に向かいました。

船の上は何も娯楽がありません。テレビも写りません。だからこのように運動するのが、非常にストレス解消になるんです。艦上体育と言っています。そうこうするうちに2晩くらいでアチェの沖に着きましたが、地震の後で海底がどうなっているか分からないので、慎重に深さなどを測りながら錨を打って、そして作業にかかりました。この時も地上からの対艦ミサイルの射程は何メートルだとかを考えて錨を打っています。

最初にヘリコプターを上げて、日の丸をとにかく見せてこいということで飛ばしました。これが津波の後のアチェの状況です。こんな感じで東日本大震災と同じです。それからインドネシアのバンダ・アチェ空港の現地の最高責任者のところへすぐに行って、表敬して調整しながら、日本はこれからやりますという話をして始まりました。

このようにして陸上自衛隊がヘリコプターに乗ってアチェに行って、陸上自衛隊の車両を現地に降ろして、そして夜も徹してヘリコプターの羽根をつけてなるべく早く飛び立てるようにしました。

これが一番評価された、重機をいろんな所に陸揚げしたという作業です。このようにしてホバークラフトの中にトラックとかをいっぱい積んでいます。これを陸揚げして行って降ろすと。それからいろんなところで道路補修を始めたということです。

こんな感じでヘリコプターでいろんな物を運んだりしました。先ほど言いましたが、いろんな偉い人が来て、説明していました。防衛庁副長官もお見えになりました。外務副大臣もお見えになりました。このようにして訓辞をくださって、隊員たちは非常にインスパイアされたと思います。こういう方たちがずっとお見えになって、自衛艦隊司令官が最後に来て、隊員たちに「正直に言え」と。「何が不満か」「日本にいつ帰れるのか」といった会話がありました。

陸上自衛隊はやっぱり上手で、キャンペーンをいろいろ張るんです。少し活動が落ち着いたところで子供たちのためにいろいろ物を買ってきているんです。サッカーボールとか。すごいと思いました。生き残った子供たちを集めて元気づけるという活動もやってきました。この辺はやっぱりすごく上手だと思いました。

これが鎮魂碑です。先ほど言いましたが、鎮魂碑をインドネシア軍が修理してくれました。これは最後の撤収の時です。いよいよ終わりという時に、水できれいに洗って陸上自衛隊が少しずつヘリコプターで船に帰っていったという状況です。最後の輸送は、海上自衛隊のヘリコプターが最後まで使えたのでそれを行って、解散式をやって日本に帰りました。もうこの頃には隊員たちは「早く日本に帰りたい」と思っていました。

錨を上げてバンダ・アチェを出航していざ日本へということで、途中シンガポールへ入って陸上自衛隊と別れて、陸上自衛隊の方はチャンギー空港から日本に帰って、我々はそのあと、また出航して日本に向かったと。日本に着いたのは3月20日くらいです。雨だったんですが、このように家族が迎えてくれて、家族にしてもやっと帰ってきたという感じでした。これはお決まりの風景なんですけど、大体海外から帰って来るとこんな感

じになります。そういうことで一連の行動は終わったわけです。

こういう活動を通じていろんな教訓がありました。海上自衛隊と陸上自衛隊が、初めてあんなに長期間、お互いに少しずつ摩擦がありながらもうまくやっていけるということが証明されたんだと思いますし、インドネシア自体が非常に感謝してくれました。さっき言ったハッタ大佐というのは、「何でおまえはハッタなんだ」と聞いたら、「自分のおじいさんが旧軍のハッタという人に大変お世話になった」と。そして「おじいちゃんが自分の名前をハッタにしたんだ」と言っていました。実はインドネシアは独立の時に、太平洋戦争が終わった時にオランダから独立戦争をやったのですが、その時に日本兵が日本に帰らずにその独立戦争を助けたんです。そのおかげもあって、インドネシアは独立できた。その兵士たちのお墓というのは、インドネシアの英雄墓地に祀られているんです。これは「ムルデカ」という映画に詳しく載っていますが、そういう土地柄もあって、私たちが行った時にも、墓地を直してくれたりといった非常にいい関係で活動できたということです。これも1つのよかったと思う点です。

このように海上自衛隊はいろんなところで活動していて、ある時ふと世界地図を見たら、海上自衛隊の50隻の船のうち16隻がなんとシンガポールより西にいたという状況もあります。それくらい海外に展開しています。我々は出航したら、沖に10キロも走ってしまうと国民の皆さんの目には見えないところにいるわけですが、このような隊員たちがいっぱいいるということを、今日のご理解いただければと思います。以上です。ご静聴ありがとうございました。

【質疑】

質問者：海外活動において、各国軍隊と自衛隊との差を感じることはありますか。

佐藤1等陸佐：ゴラン高原に行った時に感じたのは、1つは、装備の違いでした。1つは小銃で、日本隊以外は全てスコープ付の小銃を持っていました。ですから、非常に視界のいい広い高原で、もし小銃を使う場合にはスコープを使って精度の高い射撃ができた。日本隊は新しくできた89式小銃、今使っているものですがスコープがなかった。これはもし使う場合は精度に差が出ると思っていました。もう1つ、逆に長所としては、日本隊の規律の高さです。規則を守る、スピードを守るといったところは抜群で、高い評価を得ていました。そして、1人1人の能力ではありますが、装備の修理にしてもいろんな業務にしても、やり出したら「止めろ」と言うまでやり続ける。やり遂げるまで続ける。これは高い評価を受けていましたし、能力の差が歴然としていると思いました。

質問者：留守家族の安心感を参加隊員は自ら努力していると思うが、特に実行した事はありませんか。

佐藤1等陸佐：具体的にしたことといえば、自分がまず派遣隊長として自信を持つことです。UNDOF司令部に行き、状況を把握し、何が求められているのか、どういう情勢なのかというところを、つぶさに把握して行って、自分がまず考えを確立していました。不測事態対処といいますけれども、普通考えないことを、もしこんな事が起こったらというのを頭の中でずっと考えて、俺はこうするというのを全て考えていました。そこで自信を持つようにしていました。隊員に対しては、そうやってやっていたら多分みんな見ていて安心したのではないかと思います。自分では、7年前のことなのでそう思っているんですが。それで自信を持って振る舞っていく。何があっても決して慌てない。自分の頭の中で考えたことを意識していくように努めていました。家族に対しては、「現地だより」で活動状況、活躍状況を若干尾ひれをつけて、ものすごく頑張ってます、すごくいいことをやっていますと、毎週、毎月のように宣伝というか広報活動をして、家族の理解と安心を得るようにしていました。

質問者：インドネシア・スマトラ島沖地震について、多くの国が救援活動を行う上で、情報が少ない中、リーダーシップをとった国や機関はどのようなものでしたか。

内山1等海佐：特定の国がどうという話ではありませんが、インドネシアがとても上手だったと思います。というのは、先ほどご説明したバンダ・アチェ空港に2つの調整所を作りました。1番目の調整所と2番目の調整所。1番目の方は、軍関係はすべてこっちへ集まれということで、我々も含めて、各国の軍がそのAという調整所で調整していました。Bは何をやったかという、NGOや外務省など、いわゆるユニフォームでない人たち、これをきちんと2つに分けてそれぞれ活動した。これを全部1つにしてしまうと混乱してどうしようもなくなってしまう。NGOとか政府の方はよく分かりませんが、Aの方では毎日夕方、各国の軍の代表がヘリコプターで集まって、インドネシアから「そういったことは明日にしてくれ」とか「そ

れはうちではできない」「うちはできる」という議論をして、自分たちの部隊に持ち帰ってアサインしていくというサイクルができていたので、非常に効率的なジョブアサイメントをやっていたのではないかと。これはインドネシアは非常に上手だったなど。日本も過去の災害の時に、海外からの申し出があった時にこういう手段もあったのではないかと個人的には思っております。

質問者：陸上自衛隊と海上自衛隊のコミュニケーションがとりにくいとは、どのようなことがありましたか。陸上自衛隊と海上自衛隊の摩擦とは、何か具体的にありましたか。

内山 1 等海佐：すいません。言葉を間違ったかもしれません。摩擦と言ってしまったかと思いますが、そんなに仲は悪くないです。例えば、出航した時に陸上自衛隊の人は、船に乗った時にお酒が飲めないのは分かっていたんです。でも当時 1%以下のビールというのがすごく売っていたので、これならいいだろうということで 1 万本くらい積んできて、現地に持って来たんですが、我々はそれを出航してから見つけて「それ、ビールじゃないか。ダメだよ」、「これ 1%以下だからいいんじゃないの」というような議論になって、結局「それ 5 本飲んだら 5%じゃないか」という話になり、「それはダメ」と言ってしまったことから、陸の方は積んだ物を泣く泣く本国に持ち帰りました。そんな話とか、出国の時に、我々の輸送艦がいくら大きいといっても、積めるスペースは少ないわけです。でも陸上自衛隊の方は「車両も何十両も積みたい。何があるか分からないからいっぱい積んでおきたい」ということで、35 両くらい積んでいきました。結局、現地では 7 両しか降ろしていなくて、あとの 28 両は全く使わず、船の場所を占めただけでした。それはやはり文化の違いで、陸上自衛隊としては「十分な兵力で行きたい」。海上自衛隊は元々狭いところで生活するのに慣れているので「そんなもったいないスペースの使い方はしたくない」というような議論がありましたが、結局、海上自衛隊は陸上自衛隊の支援を実施するというので「仰せのとおりにします」ということで全部積んでいきましたが。もう 1 つ、シンガポールで陸上自衛隊が乗ってきたという話をしました。我々は横須賀から乗ってきてもらって、トランシットの間 2 週間くらい走るため、その間に十分な調整や摺り合わせができるので、「ぜひ横須賀から乗ってきてくれ」と言ったのですが、「いや乗らない。シンガポールから乗る」ということで、「どうしてそんなことをするのか、おかしいな」という思いはありましたが、陸上自衛隊は陸上自衛隊で派遣の人や物を準備するには、とても時間がかかるということの後から理解して、なるほどと思いました。そういった摩擦というよりも考え方とか住んでいる環境、暮らしている環境が違うということでこのようなことが起こったんですが、解決できない問題はなかったと思います。

以 上